

増田誠美術館では、冬景色のパリの町並みや郷土の冬の風景画など増田画伯が「冬」をテーマに描いた作品を展示しています。

郷土の風景画は、市内を中心に13カ所の風景が主題と成り制作期間50日を費やし完成しました。

厳寒の1、2月に早朝より現場に行きアトリエに戻ってから夜遅くまで制作にあたりました。しんしんと雪降る市内の町の風景、雄大な富士山、雪の桂川など郷土の美しい風景が描かれています。

素晴らしい郷土の風景を眺めながら、故郷の良さを再確認してみたいかがでしょうか。



ノルマンディー・ディエープ  
1969年



天神峠(玉川)  
1989年

会 期 4月16日(日)まで  
開館時間 午前9時～午後4時30分  
(入館は4時まで)  
観 覧 料 一般 300円(210円)  
高・大学生 200円(140円)  
小・中学生 100円(70円)  
( )内は20名以上の団体料金です。  
休 館 日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は  
開館し翌日が休館)、第三火曜日、  
祝祭日の翌日

次回ミュージアム都留企画展

郡内村絵図展(仮)

4月29日(土)～6月25日(日)

都留市には、『甲斐国志』の編さん資料として使用された森嶋家旧蔵の「郡内村絵図」をはじめとして、多くの村絵図が残されています。これらを展示することによって、近世における郡内地方の村々の姿を知るための糸口としていただくとともに、村絵図の作られたさまざまな理由や、現在の地図との違いなど、村絵図そのものについても紹介します。

村絵図について

村絵図は、地絵図・麓(そ)絵図などともいわれ、村の状況を視覚的に表わした図のことをいいます。検地や村境の確認、領主による調査など、様々な目的で作成され、近世(江戸時代)の村の姿を知る上で貴重な資料となっています。

村絵図では、現在の地図のような統一された記号や表現はなく、緑=田、黄=畑、桃=道、水=沼や堀などといった色分けと、建物、樹木、鳥居などの絵的な表現によって表わされ、必要な部分には地名や田・畑などの文字が書き込まれています。大きさ

は、30センチ四方の小さなものから、一辺2メートルを超えるような大きなものまで様々です。また、用紙も美濃紙や半紙1枚のもの、それらをつなぎ合わせたもの、裏打ちしたもの、軸仕立てのものなどもあります。縮尺や方位は、あまり正確でない見取り図のようなものが大半ですが、用途によっては専門の絵師・絵図師が作製にあたり、磁石や測量器具を使って可能な限り正確に記されているものもあります。